彙　報

◇展示開催の記録

○平成三〇年五月一四日～六月八日
　春季展示「琉球貿易図屏風をたどる―近現代沖縄の風景―」
○平成三〇年八月三日～九月二八日
　夏季ミニ展示「館蔵絵ビラ・引札展」
○平成三〇年一〇月一五日～一一月一六日
　企画展「菅浦文書国宝指定記念　中世近江の惣村文書」
　企画展関連講演会（平成三〇年一一月四日）
　「菅浦と大浦の堺相論～中世村落社会の実像～」
　　長浜市市民協働部学芸専門監　太田浩司氏
　「近江商人の源流としての今堀」　本学教育学部教授　宇佐見隆之氏
　「近世の菅浦村と古文書について」　青柳周一
　ギャラリートーク　青柳周一

史料館では「琉球貿易図屏風」を二年に一回、春季展示で公開してきており、本年度はその年にあたる。今回は、「琉球貿易図屏風」に一九世紀頃の琉球王国の姿が描かれていることに着目して、その後琉球が「琉球処分」によって沖縄県として日本の一部に組み込まれ、現代へと至る過程について、歴史的な風景の移り変わりと共にたどる内容の展示を企画した。これは、本年が「明治一五〇年」に当たることもあり、他府県とは異なるかたちで明治を迎えた琉球／沖縄を通じて、近代以降の歴史を捉え直すという意図にも基づいている。

具体的には、一八五六年の『ペリー日本遠征記』に掲載されたペリー艦隊による琉球来訪時の挿図や、一八七九年の沖縄県設置以降に撮影されたと思われる写真から、「琉球貿易図屏風」の中に見られるのと同じ場所のものを選び、それぞれパネル化して展示した。このうち『ペリー日本遠征記』は本学図書館所蔵の完全復刻版を、近代の写真については那覇市歴史博物館のデジタルミュージアムで公開しているものを使用した。あわせて一九世紀半ば頃に欧米諸国から琉球へ派遣された者たちの上陸や、ペリーと幕府との交渉などに関わる情報が記された古文書も数点展示した。また近代の写真と同じ地点を近年撮影した写真も掲示して、現代へ至る風景の変遷が明らかになるようにした。

観覧者数は八一八人（学内五三五人、学外二八三人）であった。大学入門セミナーでの見学は昨年と同様のクラス数であった。なお青柳は春学期開講の教養教育科目「日本の歴史」の内容と展示に関連性を持たせた上で、受講生には観覧を課し、琉球貿易図屏風の実物を見るように促した。史料館での展示および収蔵史料を授業内容へ有効に組み込むといった実践を通じて、学生に史料館への興味関心を持たせる試みは、他の教員との連携も図りながら今後も継続する。

昨年に引き続きギャラリートークを五回実施し、参加者は平均一四・四人であった（昨年は六回・平均一六人）。

また、昨年度から年二回の企画展示に加え、夏季にもミニ展示を開催している。滋賀県温暖化対策課からの、関西広域連合と連携した「みんなでお出かけクールシェア」の呼びかけに応じて、クールスポットとして協力するために企画したものである。昨年はパネルや模型等の展示であったが、今年は館蔵引札コレクションの中から、未公開であっ

た絵ビラを一九点展示した。個人の観覧者は少なかったものの、オープンキャンパスや高校生の団体見学では、綺麗な図柄に見入る姿も見られた。今後も継続して開催する予定である。

秋季企画展は、菅浦文書が国宝指定された（三月に答申が出され、一〇月三一日に官報で告示）ことを記念して、史料館で収蔵する中世文書（菅浦文書、今堀日吉神社文書、大嶋神社・奥津嶋神社文書、伊藤晋家文書）を特集することとした。この展示は科学研究費助成事業（基盤研究（A）「「菅浦文書」の総合調査及び村落の持続と変容の通時代的研究」との共催である。また展示史料の選定とキャプション・コーナー説明文の執筆などは、宇佐見隆之先生に担当いただいた。なお伊藤晋家文書については、堀井助手が担当した。

展示した史料は、菅浦文書を九点、今堀日吉神社文書を六点、大嶋神社・奥津嶋神社文書を四点、伊藤晋家文書を三点であった。菅浦文書、今堀日吉神社文書、大嶋神社・奥津嶋神社文書が史料館展示室で一堂に会するのは、平成一七年度の史料館新営一〇周年記念特別展「館蔵史料にみる近江の社会―中世から近代へ―」以来、一三年振りのことであった（伊藤晋家文書は平成二八年に史料館へ寄贈）。

観覧者は六九四人（学内二六七人、学外四二七人）で、昨年より二七一人増加した。学内では、授業で観覧を勧めるなど協力いただいたこともあって、学生による観覧が好調であった。学外については菅浦文書のネームバリューもあって、県内はもとより県外から観覧に訪れた方が例年以上に多かった。

関連講演会への参加者は一一六人であった。当日実施したアンケートの結果もおおむね好評であったが、会場（彦根キャンパス本部管理棟三階大会議室）が暑い、マイクの音声が聞き取りにくいなどの意見もあった。また従来の講演会は学祭の日以外の土曜か日曜に開催していたが、今回は学祭期間中としたため、その分展示の土日開催日が減り、一般市民が観覧できるチャンスが少なくなった。今後の検討課題として受け止めたい。

ギャラリートークは講演会当日以外にも四回実施し、参加者は平均一一・七五人であった。

◇「菅浦文書」の再調査

今年度も史料館では科学研究費助成事業（基盤研究（A）「「菅浦文書」の総合調査及び村落の持続と変容の通時代的研究」（研究代表者・青柳周一、二八年度より五年間）に基づいて、研究分担者（滋賀大学・滋賀県立大学・立命館大学・東京大学史料編纂所・琵琶湖博物館の教員・非常勤講師・学芸員）および研究協力者（福井県教育委員会職員）、研究補助者（京都大学院生およびOB・米原市教育委員会調査員など）と共に、重要文化財「菅浦文書」の再調査を行った。

具体的には、「菅浦文書」中の史料一点ごとに、研究史上でどのように解読・解釈されているかを点検してデータ化し、そのデータを踏まえて刊本『菅浦文書』の翻刻文を原本と照合してチェックする作業を実施した（原本保護の観点から、実際の照合作業には主にデジタル画像を使用）。『菅浦文書』での人物・年代比定や史料名などにも再検討を加えた。

作業は研究会形式で六回行った。また長浜市西浅井町菅浦で現地史料の調査と撮影を二回行い、撮影については今年度をもって終了する

ことができた。

このほか、今年度は史料館企画展「菅浦文書国宝指定記念　中世近江の惣村文書」を共催した（先述）。また一一月二五日に史学会大会の中世支部会シンポジウム「中世村落研究と菅浦文書」が行われることとなり、本共同研究の研究分担者が報告者等として登壇した。会場は東京大学本郷キャンパス法文二号館一番大教室で、当日のプログラムは左記の通りであった。

趣旨説明・司会　宇佐見隆之・高橋典幸

報告1「戦国期菅浦の真宗門徒と「自検断」―新出史料をもとに―」　大河内勇介

2「中世菅浦の土地利用と山林資源」　村上絢一

3「消費論からみた中世菅浦」　橋本道範

コメント　井上聡・似鳥雄一

なおこのシンポジウムの準備報告会を、七月三一日に史料館で実施した。

（青柳）

◇史料整理

引札コレクション追加購入分・濱村家引札（彦根市）・別所村木村家文書（大津市）・田川村木下家文書・七条村木野家他文書・野寺共有文書（長浜市）

◇収蔵史料検索システム　新規公開

館蔵引札コレクション（一九四点）

◇発行

ＳＡＭにゅうす四八号、四九号

『菅浦文書国宝指定記念　中世近江の惣村文書』（平成三〇年度企画展図録）

◇学部内雑誌掲載日本史関係論文

『彦根論叢』第四一六号

「〈研究ノート〉展示の刹　ハンセン病をめぐる国立療養所園内施設の現在」阿部安成

「〈資料紹介〉国立療養所大島青松園史跡めぐりと史料（1）」阿部安成

『彦根論叢』第四一七号

「加賀の名門〝横山財閥〟の企業統治能力　横山章・俊二郎兄弟の地元私鉄関与を中心に」小川功

「〈資料紹介〉国立療養所大島青松園史跡めぐりと史料（2）」阿部安成

『彦根論叢』第四一八号

「中部山岳横断を標榜した〝山林軌道〟の飛躍　金明鉄道の個人起業者・小堀定信の野望の軌跡」小川功

「〈研究ノート〉アルフレッド・パーソンズが記録した明治中期の彦根近郊の農事風景」金子孝吉

「〈資料紹介〉国立療養所大島青松園史跡めぐりと史料（4完）」阿部安成

『滋賀大学経済学部研究年報』第二五巻

「明治・大正期滋賀県における人の移動」坂野鉄也

「〈資料紹介〉国立療養所大島青松園史跡めぐりと史料（3）」
阿部安成
『滋賀大学経済学部研究叢書』第五一号
「島の野帖から　ハンセン病をめぐる療養所がある島でのフィールドワークから歴史を縁どる試み」阿部安成
『滋賀大学経済学部研究叢書』第五二号
「大島ユリイカ―ハンセン病をめぐる国立療養所大島青松園の歴史表象」阿部安成

◇史料館職員

館長・専任教員　青柳周一
兼任教員　須永知彦　　学芸員　堀井靖枝　南田孝子
非常勤職員　溝口智子

◇運営委員

阿部安成　坂野鉄也　山田和代　渡邊凡夫　井澤龍